

村木砦の戦い

天文20年(1551)、織田信長は死去し、その子信長の代になりました。しかし、織田氏の一族は内部争いが続いていた。この時期、豊後の今川義元は、天下統一のため上洛に向けて三河から尾張へ着々と勢力を伸ばしていましたが、安祥城(安城市)を織田氏の手から奪い返すと、松平氏に代わり西三河を信長支配下に治め、重原城(取良市)、香掛城(豊明市)、明海城・大高城(名古屋市)を次々に自陣に収め込み、知多地方に進出を始めました。天文22年には水野氏の領地である村木に砦を築き、さらに寺本城(知多市)も今川に奪還し、水野と織田軍は分割されてしまいました。

村木砦の戦い時 の主な城



存亡の危機に直面した水野氏総領の信元は、郡正新に使いを出して織田信長に救援を求めました。信長は、急ぎよ郡正新の守りを助ける為、織田連道三に頼み、天文23年1月20日、瀬川へ出兵しました。

村木砦の戦い



東浦町には、戦国時代の武将たちが天下統一を目指して争った戦国の一舞台となった場所があります。天文23年(1554)の村木砦の戦いが行われたところで、村木は戦後の大字桑岡にあたり、宇取手の地に今川軍が築いた砦をめぐって、水野・織田連合軍と今川軍が戦いを繰り返しました。

発行 東浦町教育委員会
東浦町郷土資料館 (3のほな館)
愛知県知多郡東浦町大字石笠字総見台18-4
電話 (0562) 82-1188

陣取は、**西側**に**石原**、**東側**に**寺本**、**南**に**織田**、**北**に**水野**の陣取であった。
 西側 陣取は石原、寺本、織田、水野の陣取であった。
 東側 陣取は石原、寺本、織田、水野の陣取であった。
 南 陣取は石原、寺本、織田、水野の陣取であった。
 北 陣取は石原、寺本、織田、水野の陣取であった。



村木砦跡の様子

下が原則。砦跡の周囲は田に変わっている。
 (写真: 1月5日、1740) (名古屋市内五交差所前) 20



村木砦跡 (推定範囲)



① 八幡社・村木砦の堀の跡の死を覚悟し、信元の家臣清水重成が元亀2年(1571)に村木砦跡に建立した。



② 八幡社・村木砦の堀の跡の死を覚悟し、信元の家臣清水重成が元亀2年(1571)に村木砦跡に建立した。

③ 八幡社・村木砦の堀の跡の死を覚悟し、信元の家臣清水重成が元亀2年(1571)に村木砦跡に建立した。

周辺史跡

④ 八幡社・村木砦の堀の跡の死を覚悟し、信元の家臣清水重成が元亀2年(1571)に村木砦跡に建立した。

村木砦の様相

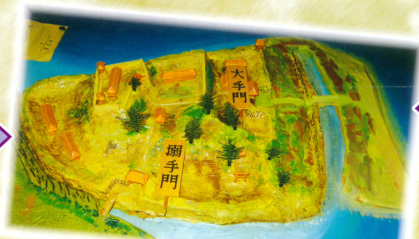
村木砦の主体部分は、現在左手取手と呼ばれる小字の北半分にあたる範囲約250m、南北約200mほどの地域です。現在はJR武豊線や道路が通り、まわりには水田が広がっていますが、この砦が築かれた天文の頃は北と東は海に面し、海に突き出た砦のような形をしていただと思われま

村木砦の戦いの歴史的背景について

村木という場所は、伊勢湾へ抜けるための交通の要所・中継地点であり、重要視された場所であったと考えられます。今川義元は、伊勢湾へ抜けるための地点・大高を攻めるための地点として村木の地を押さえたと考えられます。織田信長も村木の場所を重要視していたからこそ、信元の援軍要請に答え、今川と戦ったと考えられます。村木砦の戦いは「桶狭間の前哨戦」と言えるのではないのでしょうか。

今川はなぜ、緒川城を攻めずに村木に砦を築いたか。水野氏の態度が今川側か織田側なのかあまいだつたからだと思われます。水野氏も生き残るため、情勢に合わせて動こうと考えていたと思われます。

西（搦手）
織田孫三郎信光



外山清治氏作成による
推定復元模型

南（大堀） 織田信長
南の攻めにくい所を受け持ち、堀端に
いて鉄砲を取替え取替え撃ち放った。

東（大手）
水野軍

地に残る村木砦の記録 外山清治著「史跡村木砦」より

<村木砦の様相>

東（大手）：昭和 50 年の土地改良事業の時、古井戸が一基発見された。石組は
佐久石を使って丸形に石組みされ、井戸枠は直径 60 cm、深さ 50 cm の円形で
材質は杉材で造られていた。遺品等の出土は見られなかった。

西（搦手）：聞き伝えによると、昭和 10 年開通の大浜街道を造る時、搦手堀の
遺構が表れた。黒ずんだ蔭・蓮の実・亀の甲が何枚も掘り出された。また布
に朱色で染めた旗印の朱が真っ赤になって、堀の底で土を赤く染めていた。
鉄砲の弾丸・槍の柄等の遺物や石材等も発掘されている。

南（大堀）：南の大堀は谷間の低い地帯で、自然の雨水が西から流れ込み泥濘地
帯であった。西から東に向かって傾斜した自然を利用した泥田堀にして水を
たたえた堀であった。

<戦いに巻きこまれた村人の悲話>

今川軍は村人を徴集して村木砦を築きあげた。更に戦いでも村人がかり出さ
れたが、信長方の勝利となると、今川方の村人は反逆者として信長の命により
処刑されてしまったという悲話地元には伝えられている。戦いの戦死者を祀
るため八幡社が建てられた。

●大手井戸



【信長公記】にみる村木砦の戦い

信長公記は、信長の家臣であった太田牛一が慶長の頃に著した織田信長
の伝記です。砦の戦いの場面は首巻の「村木ノ取手攻めらるゝの事」に書
かれており、村木砦の戦いについては最も古い記録です。

天文 23 年 (1554) 正月 20 日、斎藤道三からの留守部隊が到着。信長は「も
のかわ」という馬に乗り出陣。正月 21 日は熱田泊まり。翌日はひどい嵐であ
った。しかし、信長は船頭や水夫たちを止めるも龍か舟を出させ、20 里程の
距離を約 1 時間ほどで着岸。その日は野陣を張り、翌 23 日緒川に到着。早速軍
議を開き、水野元から現地の様子をくわしく聞いた。その夜は緒川川に泊ま
った。

正月 24 日、夜明けとともに、今川軍の立てこもる村木の砦へ攻め寄せた。砦
は、北は崖で自然の要害、東は海に面した大手（表門）、西は搦手（裏門）、南は
大堀で丈夫な構えであった。

信長は南の攻めにくい所を受け持った。若武者どもは、我先にと登り、突き落
とされては又這い上がり、負傷者や死者が数多くてだが、信長の指揮のもと、我
も我もと攻め上り、堀へ取り付き、次々つ崩した。信長は、堀端にいて鉄砲を
取替え取替え撃ち放った。

西の搦手口は、信長の叔父織田孫三郎が受け持ち攻め寄せた。外丸一番乗りは
六鹿という者であった。東の大手は水野軍（水野金吾）の攻め口であった。

城中の今川方の者も懸命に戦ったが、間断なく攻め立てられ、城内の死傷者は
山ようになり、すでに日も暮れかかったため、今川方から降参を申し出てきた。
夕刻には戦いは決し、砦は落ちた。信長方の死傷者も数知れず、目も当てられな
いような有様であった。

本陣に帰陣した信長は、「それも（ご苦労）、それも（ご苦労）」と砦をねぎら
い感涙を流した。

翌日は、寺本城へ手勢の者をやり、麓に火を放ち、那古淵へ帰陣した。

美濃の斎藤道三は、家臣から信長の様子を聞くと、「すさまじき男、隣にはい
やなる人にて候よ」と言ったという。

鉄砲の伝来と村木砦の戦い

日本にはじめて鉄砲が伝わったのは、天文 12 年 (1543)、種子島（鹿児島県）に漂着したポルトガル
商人によるものでした。鉄砲の威力に驚いた領土の種子島時亮は、鉄砲の重さに等しい銀で2貫匁いど
たといわれます。時亮は、家臣に使用法と製法を習得させました。その製法はたちまち堺や近江の鍛冶に
も伝わりました。いち早く鉄砲に目をつけたのは信長でした。舅斎藤道三との会見のとき「弓・鉄砲五百
挺を従え」とあります。信長が鉄砲を初めて実戦に用いたのは、その翌年、天文 23 年 (1554) の村木
砦の戦いでした。これは鉄砲隊の威力で武田の騎馬隊を打ち破った長篠の戦いの 21 年も前のことでした。